

市場裏遺跡第13地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

埼玉県志木市教育委員会

志木市の文化財 第44集

市場裏遺跡第13地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 白砂 正明

この度、『市場裏遺跡第 13 地点』の発掘調査報告書が刊行されたことを喜ばしく思います。市場裏遺跡については、これまでに 3 地点の発掘調査が実施され、弥生時代後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡 1 軒・方形周溝墓 3 基などが検出されております。そのことから、現時点においては上記の時代に形成された集落跡そして墓域であると考えられています。

さて、今回報告する第 13 地点は、道路新設計画を含む分譲住宅建設に先立ち、埋蔵文化財の包蔵地の近接地として確認調査を行なった結果、遺構が検出されたことにより、新たに包蔵地とされた場所です。そして、事業主体者との協議の結果、宅地部分については盛土保存を適用し、道路部分については盛土保存の適用外であることから、記録保存を目的とした発掘調査を実施しました。

調査の結果、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡 1 軒と近世以降の土坑 1 基が検出されました。特に、本遺跡における 2 例目となる弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡の検出により、小規模ながら該期の集落が形成されていることが判明しつつあります。

以上のような貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる 1 ページが追加されたことになりました。今後もこうした新発見が、郷土の歴史研究のために広く活用されるよう切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地域にお住まいの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する市場裏遺跡（コード：11228-009-015）第13地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業は、志木市と株式会社ランドスタイル（埼玉県新座市東北2丁目14番7号代表取締役 小嶋由紀則）が埋蔵文化財保存事業委託契約を締結し、志木市教育委員会が実施した。
3. 本書の作成において、編集は徳留彰紀・青木 修が行い、執筆は下記のとおりに分担して行った。
尾形則敏 第1章
徳留彰紀 第2～4章
4. 遺物の実測は、石器の実測を徳留彰紀が、その他の実測を星野恵美子・松浦恵子が行った。遺構のデジタルトレースは青木 修が、遺物のデジタルトレースは深井恵子が行った。写真撮影は青木 修が行った。
5. 本地点における表土剥ぎ及び埋戻し作業については、株式会社大塚屋商店に委託した。
6. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は一括して、志木市立埋蔵文化財保管センターに保管してある。

7. 調査組織

調 査 主 体 者 志木市教育委員会

教 育 長 白砂正明（平成20年4月～）

教 育 政 策 部 長 山中政市（平成21年4月～）

生 涯 学 習 課 長 土岐隆一（平成21年4月～）

生 涯 学 習 課 主 幹 大熊克之（平成19年12月～平成22年12月）

生 涯 学 習 課 主 幹 松井俊之（平成23年1月～）

生 涯 学 習 課 主 査 尾形則敏（平成21年4月～）

生 涯 学 習 課 主 任 松永真知子（平成18年4月～）

生 涯 学 習 課 主 任 武井香代子（平成22年4月～）

生 涯 学 習 課 主 事 徳留彰紀（平成22年4月～）

生 涯 学 習 課 主 事 補 徳留彰紀（平成21年4月～平成22年3月）

生 涯 学 習 課 臨 時 職 員 吉田設子（平成19年12月～）

志木市文化財保護審議会 神山健吉（会長）

井上國夫・高橋長次・高橋 豊・内田正子（委員）

8. 発掘調査及び整理作業参加者

○発掘調査

調査担当者 尾形則敏・徳留彰紀

調 査 員 深井恵子

調査補助員 青木 修・宮川幸佳

発掘協力員 鈴木浩子・高杉朝子・成田しのぶ・二階堂美智子・松浦恵子

重機オペレータ 田中三二（株式会社大塚屋商店）

○整理作業

調査員 深井恵子・青木 修

調査補助員 星野恵美子

整理協力員 江口美千子・大橋康弘・増田千春・松浦恵子・村田浩美・林 ゆき子
一二三英文

9. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立志木第四小学校

会田 明・浅野信英・荒井幹夫・石井 寛・井上洋一・上田 寛・江原 順・大谷 徹・加藤恭朗・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・栗原和彦・黒濟和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小宮恒雄・齊藤 純・齋藤欣延・坂上克弘・坂本 彰・笹森健一・斯波 治・渋谷寛子・鈴木一郎・鈴木重信・真保昌弘・高崎直成・高橋 学・田中広明・照林敏郎・鍋島直久・根本 靖・野沢 均・原 京子・早坂廣人・坂野千登勢・藤波啓容・福田 聖・堀 善之・前田秀則・松本 完・松本富雄・望月一樹・三田光明・宮瀧由紀子・柳井章宏・山田尚友・山本 龍・和田晋治・渡辺邦仁

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行
株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。
5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。
7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y = 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡 D = 土坑 P = ピット

目 次

はじめに

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	6
第2章 発掘調査の概要	9
第1節 調査に至る経緯	9
第2節 調査の方法と経過	10
第3章 検出された遺構と遺物	12
第1節 弥生時代後期末葉～古墳時代前期	12
第2節 近世以降	15
第3節 遺構外出土遺物	16
第4章 調査のまとめ	17

図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000)	2
第2図	市場裏遺跡の調査地点 (1 / 3,000)	7
第3図	確認調査時の遺構確認状況 (1 / 400)	10
第4図	遺構分布図 (1 / 200)	11
第5図	2号住居跡 (1 / 60)	13
第6図	2号住居跡出土遺物 (1 / 4・1 / 3)	14
第7図	4号土坑 (1 / 60)	15
第8図	遺構外出土遺物 (1 / 3)	16
第9図	市場裏遺跡の遺構分布図 (1 / 1,500)	18

表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	市場裏遺跡の発掘調査実施地点一覧	7

図 版 目 次

図版1	1. 調査区近景 2. 確認調査風景 3. 表土剥ぎ後調査区近景 4. 2号住居跡調査風景 5. 2号住居跡遺物出土状態
図版2	1～3. 2号住居跡遺物出土状態 4. 2号住居跡炉跡付近遺物出土状態 5. 2号住居跡貯蔵穴・入口ピット 6. 2号住居跡赤色砂利層 7. 2号住居跡炉跡 8. 2号住居跡掘り方調査風景
図版3	1. 2号住居跡炉跡 2. 2号住居跡 3. 4号土坑 4. 2号住居跡出土遺物1
図版4	1. 2号住居跡出土遺物2 2. 4号土坑出土遺物 3. 遺構外出土遺物

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口約7万人の自然と文化の調和する都市である。

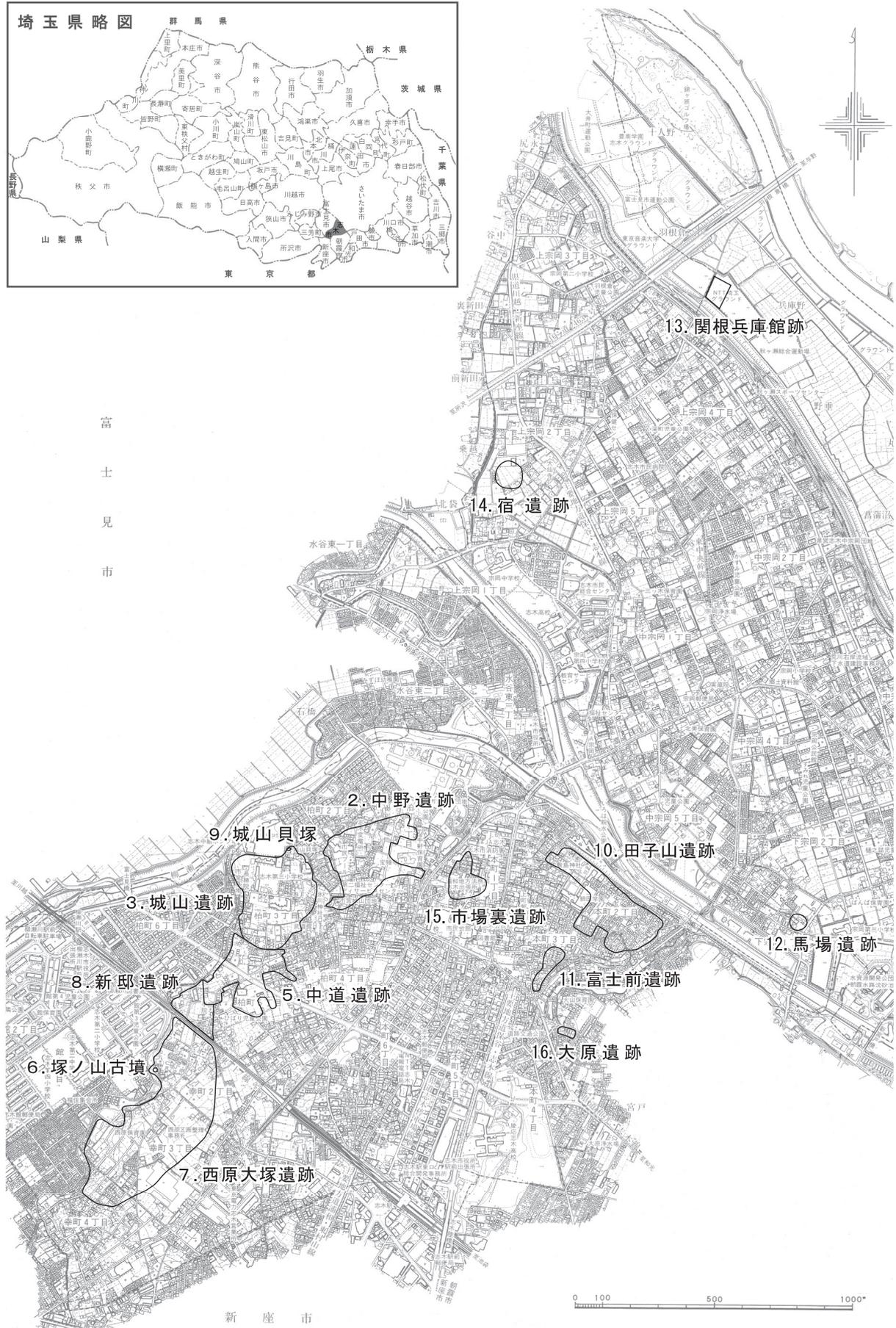
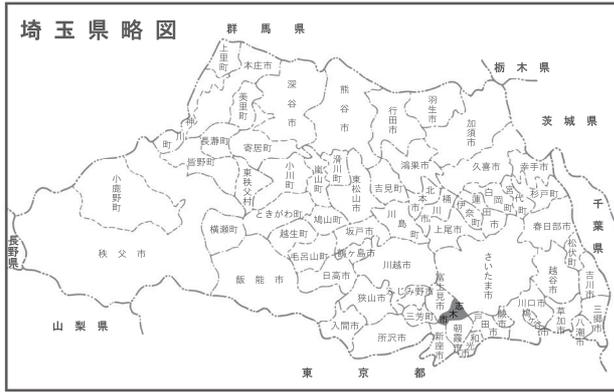
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,010 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	79,280 m ²	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鑄造関連遺物等
5	中道	45,860 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚ノ山古墳	800 m ²	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	163,930 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	16,400 m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m ²	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	62,200 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 m ²	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m ²	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m ²	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800 m ²	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 m ²	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合計		470,380 m ²					

平成22年6月30日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000)

平成 22 年 6 月 30 日 現在

(2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観する。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2ヶ所、平成7年(1995)度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13(2001)年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6(1994)年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文形土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18(2007)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された前期末葉(条痕文系)の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、撚糸文系土器が数点出土し、条痕文系土器は、城山・中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡(黒浜式期)、城山遺跡では住居跡(諸磯式期)が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、住居跡が環状に分布していることが判明しつつある。

中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1

ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が500軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期

を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20～21（2008～2009）年の第62地点の調査により、平安時代の住居跡より、皇朝十二銭のひとつである富壽神寶ふじゅしんぼうが2枚出土しており、県内でも重要な発見となっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群の前内出製品と鳩山製品の須恵器坏が1点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『たてむらきゆうき館村旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『かいこくざつき廻回雑記』（註2）に登場する「おおいしなののかみのやかた大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、『おおつかじゆうぎよくぼう大塚十玉坊』についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、

炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また平成13年の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」^{しょうりんざんかんのんじだいじゅういん}関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する市場裏遺跡について簡単に概観することにする。

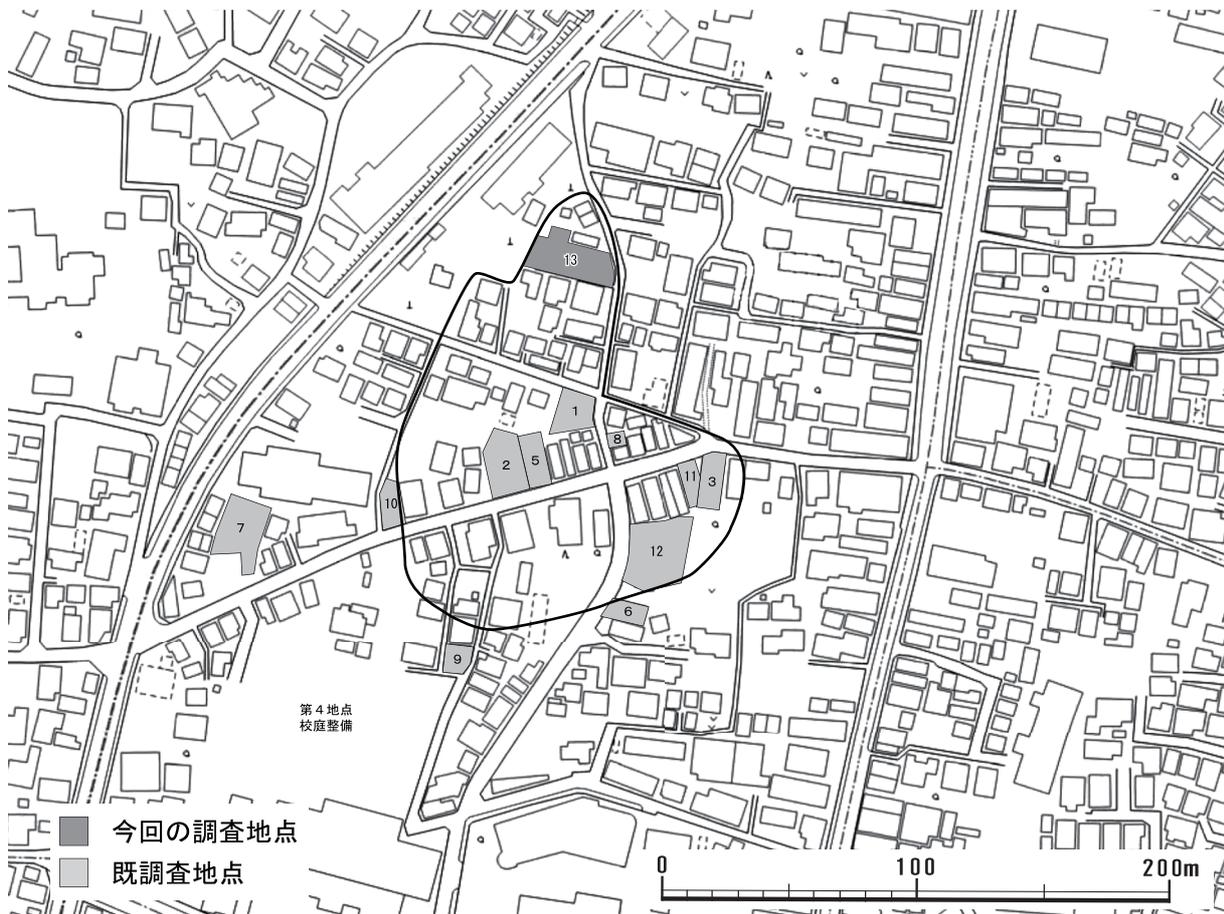
市場裏遺跡は、志木市本町1丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の1.2km程北方に位置している。本遺跡は、南北方向に約120m、東西方向に約140mの広がりを持ち、面積13,800㎡を有する、市内では比較的の小規模の遺跡である。

地勢的に見ると、武蔵野台地の北端部にあたり、標高は遺跡の中央付近で約15mを測る。北西側にかけては緩やかに標高が低くなるが、北側は低地を見下ろすようにやや断崖地形が形成されている。

本遺跡は、平成2（1990）年に実施された試掘調査により、遺跡が発見され、新規に遺跡として登

録され、第1回目の発掘調査が実施されている。今回報告する第13地点を含め、確認調査は13地点を実施している(第2図)。発掘調査を実施した地点は、第1・2・3地点、そして今回の第13地点の4地点である。第2表に上記4地点の発掘調査の概要を簡単にまとめる。

なお、古くから住宅が密集する本遺跡周辺は、今後、個人住宅の建て替えなどの小規模開発に伴う発掘調査が主流になるものと予想される。



第2図 市場裏遺跡の調査地点 (1/3,000)

平成22年6月30日現在

調査地点名	検出された遺構	検出された遺物	参考資料
第1地点	弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 1軒	土器	尾形(1996)
第2地点	弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓 2基、中世以降の土坑 3基	土器	佐々木(1996)
第3地点	弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓 1基	土器 かわらけ(包含層)	尾形(1993)
第13地点	弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 1軒、 近世以降の土坑 1基	土器	本報告書

第2表 市場裏遺跡の発掘調査実施地点一覧

第1章 遺跡の立地と環境

[註]

- 註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。
- 註2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

[引用文献]

- 神山健吉 1988「廻回雑記」に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察『郷土志木』第7号
2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号
- 尾形則敏 1993『志木市遺跡群V』志木市の文化財第20集 埼玉県志木市教育委員会
1996「第7章 市場裏遺跡第1地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点
中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点
田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書』
志木市の文化財第24集 埼玉県志木市教育委員会
- 佐々木保俊 1996「第12章 市場裏遺跡第2地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地
点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21
地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調
査報告書』志木市の文化財第24集 埼玉県志木市教育委員会

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成21年11月、土地所有者である株式会社豊城より志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木工事計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。土木工事の計画は志木市本町1丁目1576-1（面積462.65㎡）内に道路新設工事を含む分譲住宅建設（5棟）を行うという内容である。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である市場裏遺跡（コード11228-009-015）の隣接地に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査を実施し、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、現状保存・盛土保存が不可能である場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。
3. 本遺跡における埋蔵文化財の分布状況については、周辺の調査結果に基づき、状況を説明する。

平成21年11月24日、教育委員会は、工事主体者である株式会社ランドスタイルより埋蔵文化財確認調査依頼書を、土地所有者である株式会社豊城より埋蔵文化財確認調査承諾書をそれぞれ受理し、12月3・4日に確認調査を実施した。発掘届は12月24日付けで提出を受けた。

確認調査は、第3図に示すように調査区の長軸にあたる東西方向に2本、調査区北西側突出部分には南北方向に2本、東端に1本、それぞれ幅1.5m程のトレンチを計5本設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、1号トレンチの東側に弥生時代末葉から古墳時代前期に属すると思われる住居跡を、2号トレンチからはピット1基、3・4号トレンチからは近世以降の土坑3基をそれぞれ確認した。これにより、本地点が埋蔵文化財包蔵地内であることが判明したため、12月4日付けで、埼玉県教育委員会に変更増補カードを提出し、同25日付けで遺跡台帳に登載された。

教育委員会はこの結果をただちに工事主体者に報告し、埋蔵文化財の保存措置を講ずるように要請した。12月11・24日の事前協議を経た後、道路新設部分（104.67㎡）については盛土保存の対象外であることから記録保存のための発掘調査を実施することとし、宅地部分（357.98㎡）については、保護層を30cm以上確保する条件で盛土保存を適用することと決定した。5棟分の発掘届及び計画図面を随時提出し、基礎工事の際には工事立会を実施することとした。

工事主体者から教育委員会に発掘調査の依頼があったため、12月24日に委託契約を締結し、平成22年1月6日付で埋蔵文化財発掘調査通知を埼玉県教育委員会に提出した。

これにより、平成22年1月19日から教育委員会を主体として発掘調査を実施した。なお、発掘調査通知書番号は教文第5－1036号 平成22年1月19日付けである。

その後、盛土保存の対象となった宅地部分（357.98㎡）については、5棟の分譲住宅の計画が決定された段階で、随時必要書類の提出を受け、これに伴い3期（平成22年5月11日、7月13日、7月27日）にわたる工事立会を行い、盛土保存が適正に行われたことを確認した。

第2節 調査の方法と経過

以下、調査工程を日付順に記す。

1月18日 道路新設部分を調査対象として設定し、重機による表土剥ぎ作業を実施した。作業にあたっては、盛土保存適用とした宅地部分にあたる調査区北側を残土置場とする。

19日 器材搬入後、人力による発掘調査を開始し、遺構確認作業を実施した。調査区東側に弥生時代末葉～古墳時代前期の住居跡1軒（2Y）、調査区中央に土坑1基（4D）、調査区全体からピット数基をそれぞれ検出した。ピットについては、調査区西側から検出した1基に遺構名を付した（P1）。

2Yの精査を開始した。南北・東西方向にベルトを設定し、掘り下げた。

4Dの精査を開始した。短軸にあたる東西方向にベルトを設定し、掘り下げた。

20日 調査区西側で検出したP1を含むピット数基を完掘し、平板測量により平面図を作成し、同時にレベルの記録を行った。

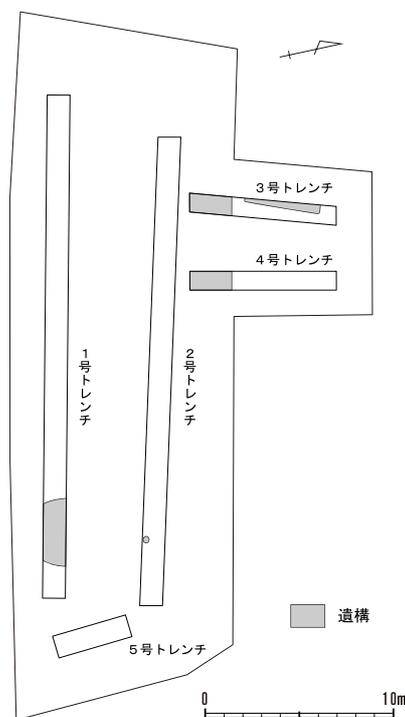
2Y精査。確認面より約20cm掘り下げた。弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器片数点が出土した。2Yの一部が調査区外に広がるのが判明したため、工事主体者と協議の上、部分的な拡張を行った。

4D精査。土層断面の記録を行った。平板測量により、平面図を作成した。これにより、調査区西側の調査を完了した。2Yの北東に柱穴を確認した（P2）。

21日 2Y精査。床面及び壁面、周溝を検出した。南東隅に貯蔵穴を、またその周囲に凸堤を確認した。貯蔵穴の南側に暗赤褐色の砂利層を検出した。遺物については、床面直上から出土したものを除き、出土状態を記録し、取り上げた。土層断面の写真撮影・実測を行った。ベルトを除去し、床面直上から出土した遺物について、出土状態の記録後、取り上げを実施した。住居中央北側に炉を検出し、炉内からは粘土板を検出した。

22日 2Y精査。貯蔵穴、柱穴を精査し、土層断面を記録。遺構の完掘状況を写真撮影後、平面図を作成する。エレベーション図を作成。貼床を剥がし、断面図に記録。精査を終了し、器材搬出。

23日 重機による埋戻し作業を行い、調査終了とする。



第3図 確認調査時の遺構確認状況（1／400）



第4図 遺構分布図（1 / 200）

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 弥生時代後期末葉～古墳時代前期

(1) 概要

検出された遺構は、弥生時代後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡1軒(2Y)である。

2Yは隅丸方形を呈する小形住居で、1軒分を完掘することができた。出土遺物としては、壺・甕形土器などが出土した。

(2) 住居跡

2号住居跡

遺構(第5図)

[住居構造] 1軒分を完掘した。遺存状態は良好である。(平面形)辺がやや丸みを帯びた隅丸方形。(規模) 3.64 × 3.72 m。(壁高) 30～37cm。(壁溝) 全周する。上幅 13～18cm・下幅 4～7cm・深さ 3～6cm。(床面) 壁際と炉を除いて、硬化面を検出した。南東隅に赤色砂利層を検出した。床面直上に長軸 84 × 短軸 56cmの範囲で広がり、層厚は 4cm。(炉) 粘土板炉か。西側に粘土板を検出した。全体に被熱し、赤化していた。(貯蔵穴) 南東隅に検出した。長軸 41 × 短軸 34 × 深さ 21cm。楕円形を呈する。貯蔵穴を囲むように、凸堤が巡る。(柱穴) 支柱穴は検出されなかった。中央南側の壁際に、深さ 27cm程度の掘り込みを検出した。入口施設と思われる。(覆土) 黒褐色土・暗茶褐色土を基調とし、よくしまる。

[遺物] すべて土器で、大半は覆土下層ないし床面直上からの出土である。覆土上層から出土した遺物は少ない。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

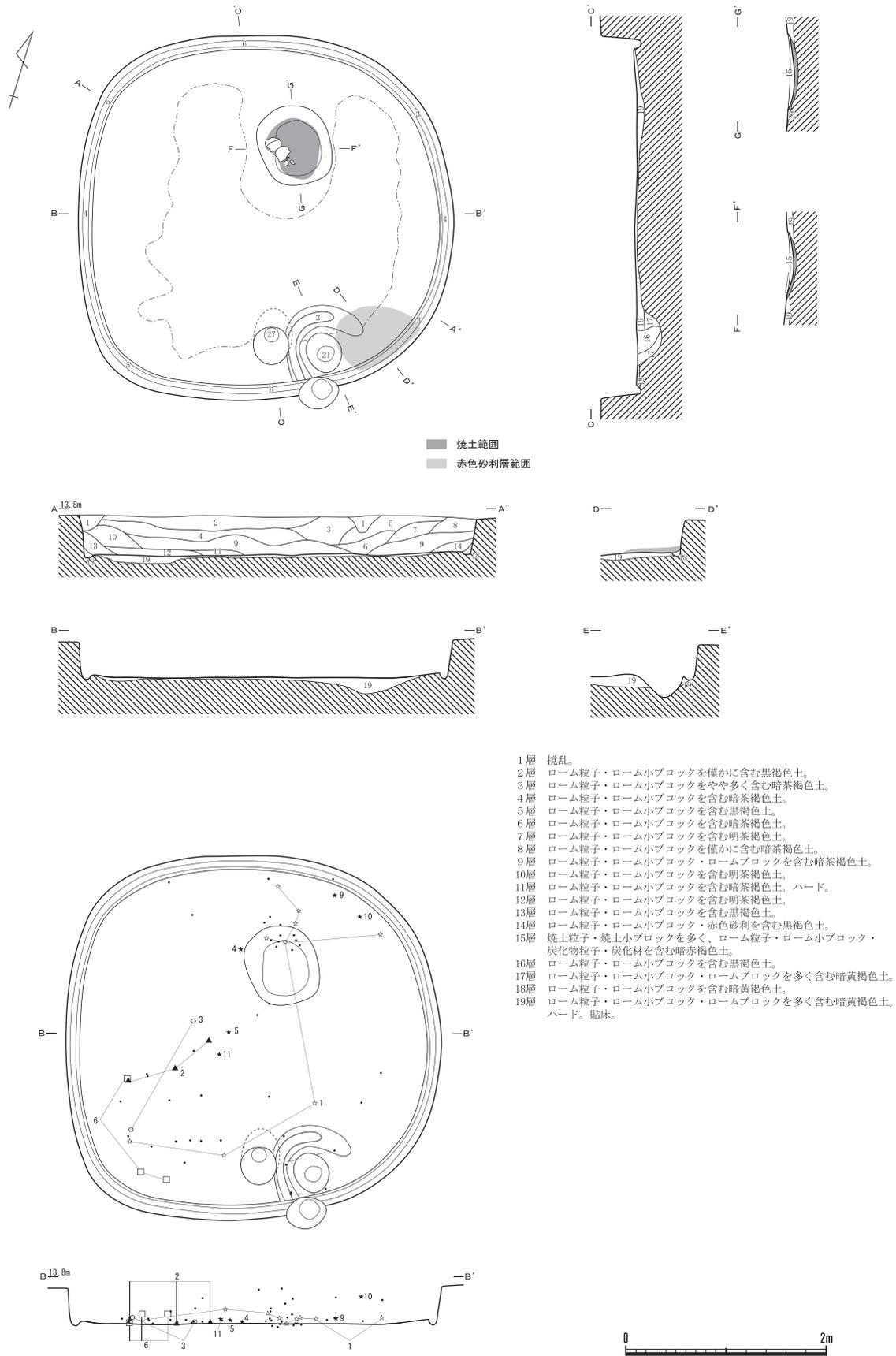
遺物(第6図)

1は複合口縁を持つ壺形土器の口縁部片。残器高 7.7cm、推定口径 18.8cm。口縁部の地文は上位から1段の縄R・L・Rをそれぞれ横位施文することによって3段の羽状構成をとる。地文施文後、棒状貼付文が貼付され、口縁部中央に円形赤彩文が施される。頸部はハケ目調整後に縦方向にヘラ磨き調整が施され、赤彩される。口縁部直下のヘラ磨き調整が及ばない部分には、赤彩も及ばない。内面は横方向にヘラ磨き調整が施され、赤彩される。

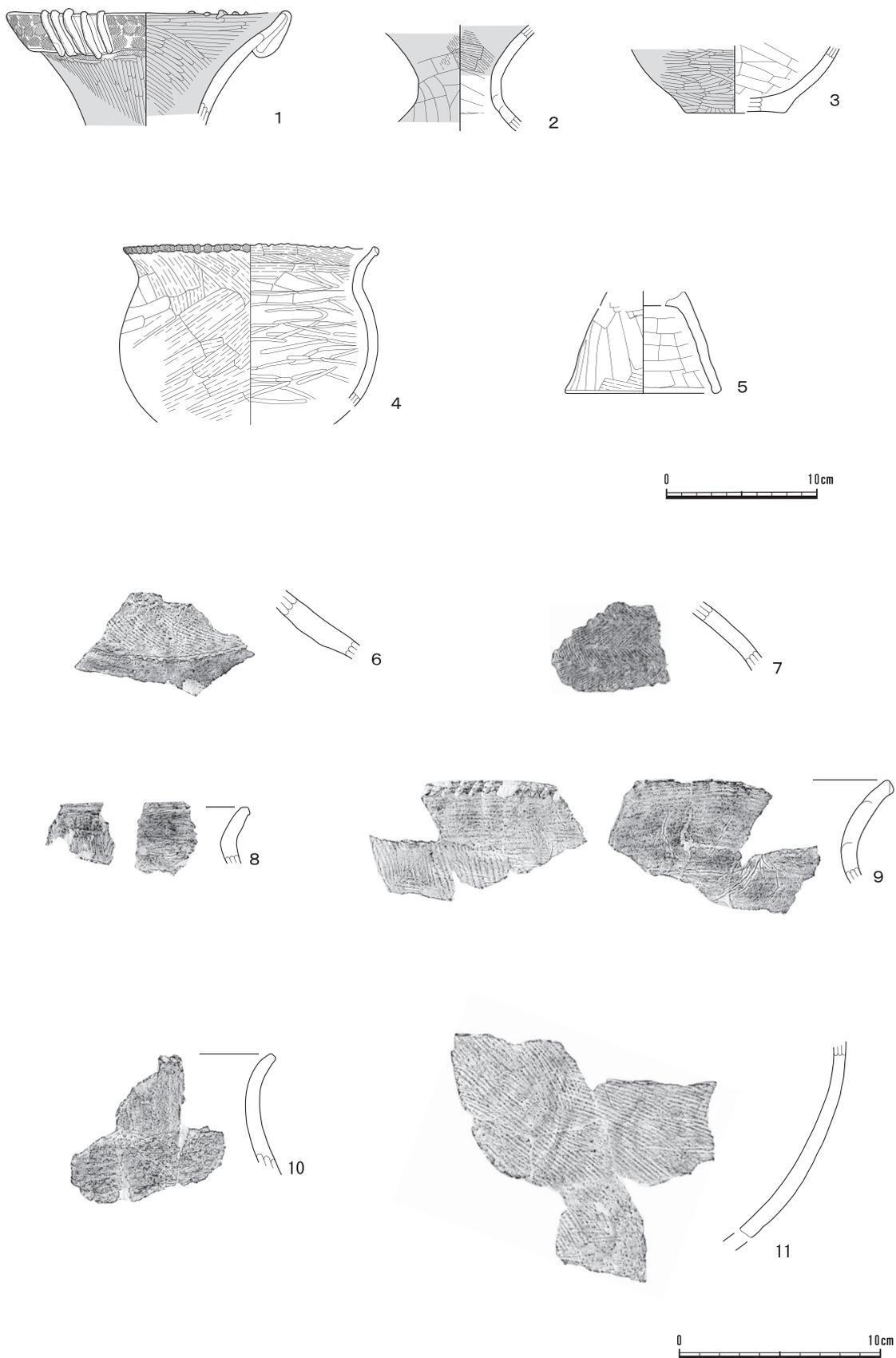
2は壺形土器の頸部片。残器高 6.1cm。外面はハケ目調整後に赤彩される。内面はハケ目調整と赤彩が括れ部分まで及ぶ。胎土には白色粒子がやや多く含まれる。

3は壺形土器の底部片。残器高 4.2cm、推定底径 6.5cm。底部はやや上げ底状を呈し、胴部は膨らみながら立ち上がる。外面は横方向にヘラ磨き調整が施され、赤彩される。内面は横方向にヘラナデが施される。

4は台付甕形土器。残器高 11.9cm、口径 16.9cm。口縁部の一部と胴下半部以下を欠損する。胴部中央で膨らみ、頸部で括れ、口縁部は外反する。口唇部には布目状圧痕を伴う押捺が内外面調整後に施される。外面は口縁部から頸部にかけては右下がりに、胴部は右上がりにそれぞれ粗いハケ目調整が施される。内面は口縁部付近はほぼ水平方向にハケ目調整が、胴部はヘラナデ後部分的にヘラ磨き調整が施



第5図 2号住居跡 (1 / 60)



第6図 2号住居跡出土遺物 (1 / 4・1 / 3)

される。色調は明黄褐色で、胎土はきめ細かく、黄褐色粒子・白色粒子を含む。炉跡西側の床面付近からまとまって出土した。

5は台付甕形土器の脚台部。残器高 6.8cm、底径 10.2cm。裾部にかけて、やや内湾しながら「ハ」字状に広がる。外面は縦方向に、内面は横方向にヘラナデが施される。外面底部付近の一部は横方向にハケ目調整が施される。色調は、ややにぶい黄褐色で、胎土には黄褐色粒子を含む。

6は壺形土器の肩部片。地文は端末に結節が施されたLR・RL横位施文による羽状縄文。S字状結節文上には部分的に円形赤彩文が施される。文様帯以外の器面は赤彩される。

7は壺形土器の肩部片。RL・LRの縄文横位施文によって4段の羽状構成が確認できる。一部に円形赤彩文を確認できる。

8は甕形土器の口縁部片。口縁部が外反する。口唇部はハケ状工具による面取りがなされる。外面は縦方向に、内面は横方向にそれぞれハケ目調整が施される。

9は甕形土器の口縁部片。口唇部にはハケ状工具の端部押圧による刻目が施される。外面の口縁部は横方向に、頸部は縦方向に、内面は口縁部・頸部とも横方向にハケ目調整が施される。色調は灰褐色。

10は甕形土器の口縁部片。口縁部は縦方向に、頸部以下は横方向にハケ目調整がなされる。色調は黒褐色で、胎土には赤黄褐色の粒子を多量に含む。

11は甕形土器の胴部下半の破片。外面はハケ目調整が左上がり施される。胎土は脆く、白色粒子・赤黄褐色粒子を多量に含む。

第2節 近世以降

(1) 概要

調査区中央及び西側から土坑1基(4D)とピット数本が検出された。ピットについては、遺物が出土しなかったため、時期の特定には至らなかったが、覆土の観察から近世以降とした。

(2) 土坑

4号土坑

遺構(第7図)

[構造] 南側は調査区外。(平面形) 細長い長方形を呈する。

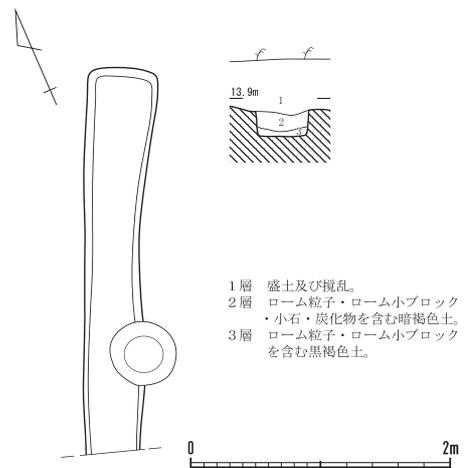
(規模) 不明×43～55cm。(深さ) 16～20cm。(覆土) 黒褐色土・暗茶褐色土を基調とし、堅くしめる。

[遺物] 灯明具片1点が出土した。

[時期] 出土遺物・覆土から、近世以降のものと考えられる。

遺物(図版4-2)

1は灯明具の脚部片。ロクロ成形後、透明釉が施される。色調は橙色を呈する。胎土はきめ細かく、白色粒子・黒色粒子を僅かに含む。19世紀。



第7図 4号土坑(1/60)

(3) ピット

1号ピット

遺構(第4図)

[構造] 調査区西側に検出した。(平面形)円形。断面逆台形を呈する。(規模)27×34cm。(深さ)18cm。
(覆土) 暗黄褐色土を基調とし、しまりは悪い。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、近世以降のものと考えられる。

2号ピット

遺構(第4図)

[構造] 調査区中央、2 Yの西側に検出した。(平面形)楕円形。(規模)78×55cm。(深さ)53cm。(覆土) 暗黄褐色土を基調とし、しまりは悪い。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、近世以降のものと考えられる。

第3節 遺構外出土遺物

ここでは表土及び攪乱から出土した遺物に加え、他時代の遺構への混入品として判断した遺物を遺構外出土遺物として扱う(第8図・図版4-3)。

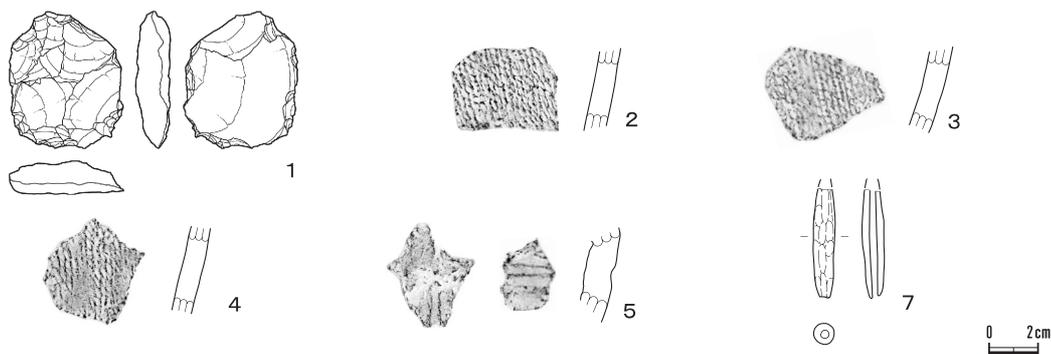
1は二次加工のある剥片。砂岩製。長さ5.5cm、幅4.3cm、重さ32.3g。横長剥片を素材とし、背面に二次加工を施す。両面縁辺に微細な剥離痕を確認できる。縄文時代の所産と思われる。

2～4は撚糸文系土器の胴部片。撚糸Rが縦位に施文される。縄文時代早期前半。

5は貝殻条痕文系土器の胴部片。1条の幅4mm程の条痕が、表面は縦位、内面は横位に確認できる。縄文時代早期後半。

6は須恵器壺形土器の肩部片か。胎土は灰褐色を呈し、黒色粒子を僅かに含む。ロクロ成形の痕跡を確認できる。自然釉の付着を確認できる。器厚は約8mm。古墳時代から平安時代。写真図版のみ図示した(図版4-3)。

7は土錘。端部を僅かに欠損する。長さ4.8cm、最大径0.8cm、孔径0.3cm、重さ2.6g。中央に最大径を持ち、両端がやや細くなる。平安時代のものと思われる。



第8図 遺構外出土遺物(1/3)

第4章 調査のまとめ

ここでは、本調査の成果のうち、2号住居跡の遺構・遺物について所見を述べる。また、これまでの調査成果も合わせて、市場裏遺跡の様相についても所見を述べることとする。

(1) 2号住居跡について

2号住居跡からは、貯蔵穴やそれを囲む凸堤、赤色砂利層、粘土板を持つ地床炉などが検出された。主柱穴こそ確認されなかったが、弥生時代後期末葉から古墳時代前期における住居跡の一般的な構造が確認できた。特に、赤色砂利層については、「赤砂」や「祭壇状遺構」と呼称され、当該期を特徴付ける要素とされている。最近では東京都北区道合遺跡の報告で分析されており、ここでは赤色砂利層の住居跡内における出土状況の検討から、「住居廃絶に伴う儀礼」に伴って「蒔かれた」ものと想定した上で、住居廃絶過程における儀礼のタイミングや、集落内における出現頻度などの問題が提起されている（飯塚2010）。

本住居跡の赤色砂利層については、貯蔵穴東側の床面直上から検出されており、本市域をはじめ先述の道合遺跡における事例とも同様の出土状況が確認できたといえる。集落内における出現頻度については、本遺跡における住居跡検出事例が僅少のため検討段階になく、新たな成果を待ちたい。その際には、本市に所在する当該期の大規模集落である西原大塚遺跡における分析と検討も必要となるだろう。

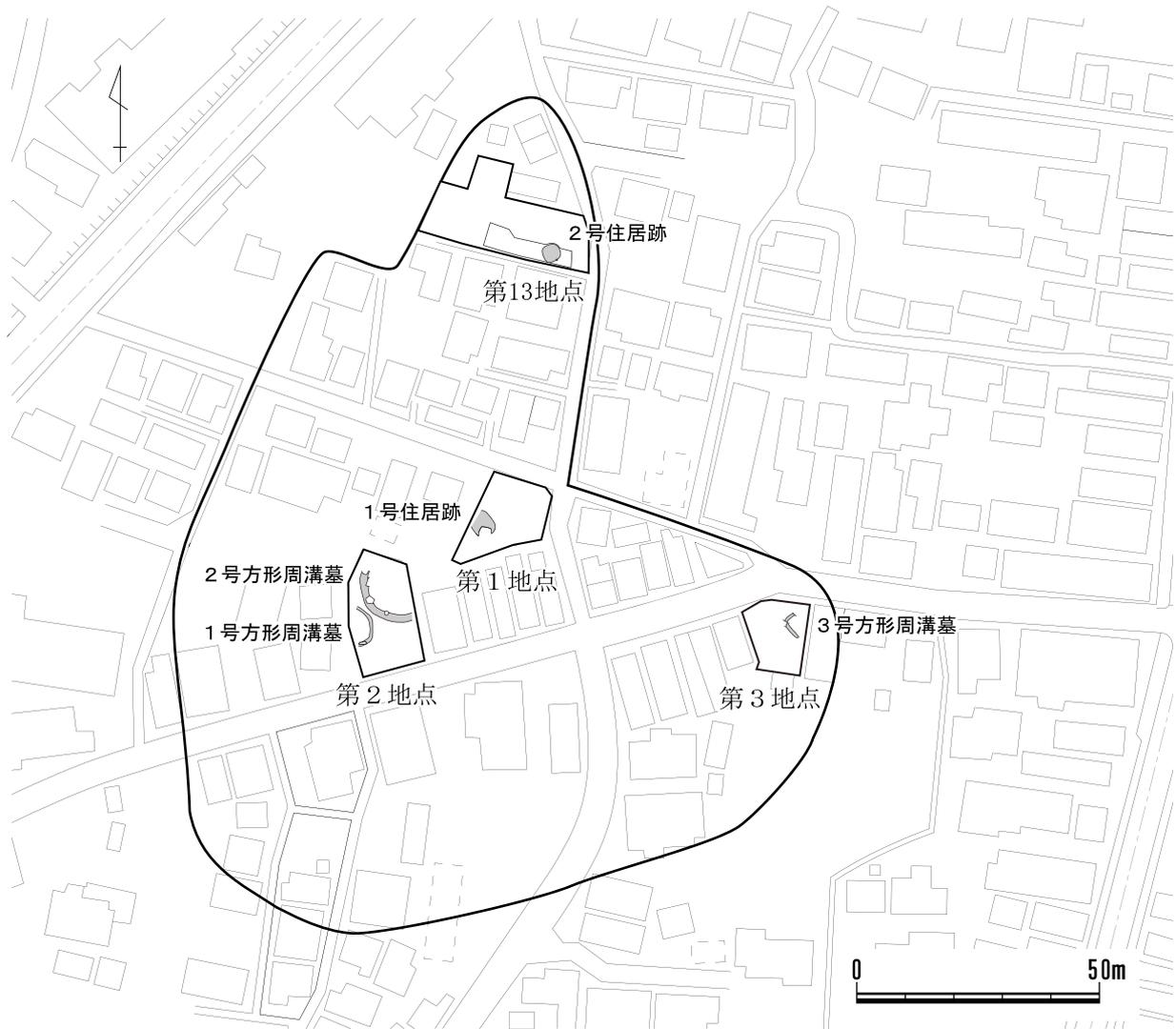
遺物では、台付甕（第6図4）が注目される。口唇部に施される押捺が、布目状圧痕を呈することが特徴的である。本来、市内及び周辺地域から出土する台付甕の口唇部には、ハケ状工具の端部を用いた刻目が施されるのが一般的である。布目状圧痕を伴う押捺を施すのは、一部の壺形土器に特徴的な属性であり、市内でも田子山遺跡21号住居跡出土土器に認められる（尾形1998）。これは、施文具・工具の形態や素材の問題に加え、土器製作における器種と施文具・工具の選択、器種と文様要素との関係に対して、示唆的な内容を含んでいる。また、器面調整についても、粗いハケ目調整が施されていることが特徴的で、異質性を際立たせている。今後、当該資料の系統的な位置付けが課題となるだろう。

(2) 市場裏遺跡における弥生時代後期末葉～古墳時代前期の様相について

当該期に属する遺構では、住居跡2軒、方形周溝墓3基が確認されている。各遺構は、市内では比較的狭い本遺跡内に疎らに存在しており、小規模集落の様相を呈している（第9図）。住居跡の軒数に比して、方形周溝墓の検出数が多いことが本遺跡の特徴であろう。

遺跡内における遺構の種別毎の分布状況については、調査地点数が少ないこともあり判然としないが、現在までのところ、遺跡北側に住居跡、南側に方形周溝墓という様相が看守できようか。集落の時期的変遷については、各遺構とも出土遺物が少なく、遺構同士の切り合いも確認できないため、遺跡内での細別も難しい。現段階では、弥生時代後期末葉から古墳時代前期として一括で扱うしかないだろう。

本遺跡は小規模であり、遺構の密度も高くない。しかしながら、当該期において本遺跡のような小規模集落が存在することは、特に同時期に属する大集落の位置付けを考える上で重要となり、様相の解明が求められる。今回の調査によって、本遺跡がこれまで捉えられていたよりも広範囲に展開していることが判明し、遺跡の北側部分に居住域が広がる可能性を示した。今後、本遺跡における調査を実施していく上で、念頭におくべき成果を提示したといえる。



第9図 市場裏遺跡の遺構分布図(1 / 1,500)

[引用・参考文献]

尾形則敏 1993『志木市遺跡群V』志木市の文化財第20集 埼玉県志木市教育委員会

1996「第7章 市場裏遺跡第1地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点
中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点
田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書』
志木市の文化財第24集 埼玉県志木市教育委員会

1998「志木市田子山遺跡の弥生時代後期の事例について—田子山遺跡第31地点の弥生時代21号住居跡出土の資料—」『あらかわ』創刊号 あらかわ考古談話会

佐々木保俊 1996「第12章 市場裏遺跡第2地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点
中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第
21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発
掘調査報告書』志木市の文化財第24集 埼玉県志木市教育委員会

飯塚武司 2010「2. 弥生時代」『北区 道合遺跡—独立行政法人都市再生機構による赤羽台団地(第I期2BL)建替事業に伴う
調査—』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第247集 東京都埋蔵文化財センター

圖 版



1. 調査区近景



2. 確認調査風景



3. 表土剥ぎ後調査区近景



4. 2号住居跡調査風景



5. 2号住居跡遺物出土状態



1. 2号住居跡遺物出土状態



2. 2号住居跡遺物出土状態



3. 2号住居跡遺物出土状態



4. 2号住居跡炉跡付近遺物出土状態



5. 2号住居跡貯蔵穴・入口ピット



6. 2号住居跡赤色砂利層



7. 2号住居跡炉跡



8. 2号住居跡掘り方調査風景



1. 2号住居跡炉跡



2. 2号住居跡



3. 4号土坑



1

2



1口縁部拡大

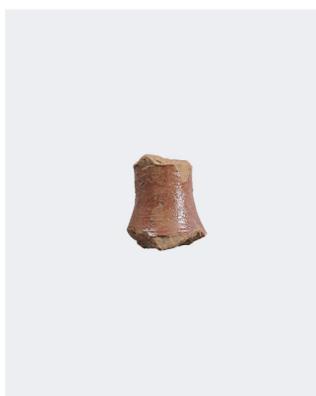


3

4. 2号住居跡出土遺物 1



1. 2号住居跡出土遺物 2



2. 4号土坑出土遺物



3. 遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちばうらいせきだい13ちてん まいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしよ							
書名	市場裏遺跡第13地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財	巻次	第44集					
編著者	徳留彰紀 尾形則敏 青木修							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048(473)1111							
発行年月日	平成23(2011)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちばうらいせき 市場裏遺跡 (第13地点)	しきしほんちよう 志木市本町 1丁目1576-1	11228	009-015	35° 50′ 00″	139° 34′ 39″	20100118 ～ 20100122	462.65 (104.67)	分譲住宅建設 (道路新設工事)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
市場裏遺跡 (第13地点)	集落	弥生時代後期末葉～ 古墳時代前期 近世以降		住居跡	1軒	土器		
				土坑	1基			
				ピット	数本			

志木市の文化財 第44集

市場裏遺跡第13地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市教育委員会

埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 平成23(2011)年3月31日

印刷 株式会社 白峰社